

と具象との融合した内的直観の世界を描き出すのであるが故に、客観偏重の舊時代的表現によらずに、主客一如主義の上に立つた新感覺派的表現に據らなければならぬことを云つてゐる。要は客観を通して主観を匂はせようとするのではなく、主観其物を、或は客観を抱き込んだ主観の相貌を、出来るだけ露骨端的に表出しようとするのが、新時代の要求であり意圖であつたのだ。だから彼等の表現には、出来るだけ平面的概念的な説明が避けられて、出来るだけ具體的直截的であらうとする努力の跡が著しい。平面的な論理と證明された妥當さとは、だから彼等の表現には殆ど認められない。概念的思惟的に辻褄を合はせるための努力は、ここでは全然閑却されてゐる。その代りに表現を出来るだけ具體感によつて塗りつぶさうとするが故に、譬喩や聯想や象徴的手法やが目まぐるしい程に頻用される。「急行列車は素晴らしい勢で驀進した」と云つても濟むところを「沿道の小驛を小石の如く黙殺した」といふ喚喩的表現によつて、暗示的思念喚起的に速力といふものゝ具體感を喚び起こさせようとするやうな努力が、彼等の才分の殆んど全部を傾けさせてゐる。さうしてさういふ表現法のために、簡潔さは寧ろ失はれて、却つて時にまだるつこい饒舌をかかされるやうな感じを起させられることもあるけれども、流石に潑瀾たる生命感と具體感とは十分に表現し盡されてゐる。然もさういふ具體的表現が論理的妥當さによつて統括され配列されてはゐないのだから、そこには當然飛躍から飛躍への發展が期待されなければならぬ。さういふ勢ひの極まつた時には、そこにはたゞ作者の直観と讀者の感受性とが交響するに

必要なだけの閃光的表現があるだけでさへある。云はゞ平面的な論理と妥當性との代りに、立體的飛躍的な所謂感覺の論理、乃至は新感覺的妥當性が、置きかへられてゐるのだ。「仁丹の廣告燈がぼつと頭の中を紅く染めた」といひ、「隣室の男の鼾聲が妹の寝顔を撫でゝゐる」といふやうな文章をとつてみても、そのことは明瞭になるだらう。これを西川勉氏が名づけたやうに比論動律表現と云つてもいい。川端氏が主張したやうに主客一如主義の表現と云つてもいい。橋爪健氏の主張する視點の移動の同時的表現と見られないこともない。客観に注がれた視線が、次の瞬間には主観の内部に注がれて、然も前後二段の異つた平面の世界が、流動する主観の活動によつてのみ統べられてゐることが、兎に角そこに感じられるのだから。客観に沈潜して流動する生命のリズムを體驗しようとする新時代の努力は、かくて云ひ換へれば客観そのものを對象とする藝術運動ではなくて、却つて複雑な心象の活動其物を對象とするものとなつて來るのである。

此處まで來れば、新時代の藝術運動は、前に表現上の關心からのみ注意されたと云つた泰西の新主観主義の藝術形式に、ある内容を含ませることが出来るやうになつた譯だ。さういふものを要求する内的必然が幾分かは動きはじめた譯だ。表現主義もダダイズムも構成主義も、かくて外部的摸倣の域から一步を進めて、彼等の内部的生命の燃焼を托すべき必然の形式となつて來た譯だ。横光氏がその「感覺活動」に於て、文藝時代同人其の他の數多い作家を、かういふ新傾向に結びつけて論じたのは、多少牽強の形がないでもなかつたけれども、兎に角片岡鐵兵氏の「甘い物

語」のやうな、視點の移動と同時的意識内容の複雑な表現とを含んだ作品も現れた。今東光氏の「内に開く薔薇窓」のやうな、多端な連想作用によつて配列された部分が——部分的重點の數多くが、橋爪氏の所謂反撥的必然性によつて、中心的な主題、或は統一的必然性へ、有機的に、且つ有効に結びついて行つて、複雑な効果を現はすといふやうな作品も現れた。幻想的昂奮と現實的な生活とを、生活を組み立てる要素として、全然同一の重さと同じ性質をもつものと見る岸田國士氏の「紙風船」や、乃至はさういふ傾向のもつと主觀的な方向に傾いた稻垣足穂氏の作品のやうなものも現れた。自ら構成派を以て居り、新しき主觀の構成をもたぬ作品を貶する中河與一氏にも、「氷る舞踏場」の如き構成派的意圖のほかに現はれる作品があるのであつてみれば、必ずしも主張にのみ急なる人も云はれない。横光氏が前にも云つたユーモラス、ストオリイなる言葉に^aの冠詞をつけたことで、生田長江氏を逆に擲論してゐるのなども、取り立てて云ふべき程に珍らしい意見でないけれども、兎に角舊物破壊、新價值樹立のダダ的精神の現れでないとは云はれなかつた。新しき價值を發見する、古い傳統的精神の支配を脱して、新しき價值を發見する——彼等はしきりにそれを口にした。「われわれは傀儡を作る」と叫んだ横光氏の有名な宣言なども、結局はさういふ新しき價值の發見と創造への精進に没頭するものゝ、座右の銘であつたのだ。

かういふ傾向の、必然の歸結乃至は頂點として、其處新時代に當然期待さるべきものは、白熱

した人間の意志でなければならなかつた。人間の力への信仰と生活の主觀化とでなければならなかつた。客觀を動かさうとする努力でなければならなかつた。發見した新しき價值を、人生に植ゑつけようとする意志的努力でなければならなかつた。新時代の一部評論家も、明瞭に其の點を意識した。赤木健介氏は、「當來の文藝に最も榮ゆべきものは、世界主義と新理想主義とを主題とした哲學的意義のあるものであるかと思はれる」と云つてゐるし、伊藤永之介氏も白熱する意志の力を要求した。伊藤欽二氏も新理想主義哲學の必然的轉廻の方向への關心を要求した。

廣津和郎氏は嘗て新時代が思索しないといふことを云つた。十九世紀思想の行き詰りに際會して、生活の指標を失つた新時代は、實際思索的には生きなかつた。衝動の行くに任せて、そこに僅な生命感の燃焼を味ははうとした。前に云つた堀木克三氏が、思想と人生觀の缺乏を以て新時代を非難するといふやうなことも、かくて起り得た譯だつたし、又それが、新時代の由來するところから考へては、必ずしも非難に値しない——或は一口に非難するのは、些か酷に失するものであつたことは、前に述べて來た通りであつたのだが、此處まで來た時、新時代はその發展の當然の徑路を辿つて、新しき思索と人生觀とにまで到達すべき境に、登りつめて來た譯だ。必然を辿つて、意志を基調とした對人生の態度を確立すべきところに来て來た譯になるのだ。新時代は無論さういふ必然をも辿つた。理想派的傾向が微ながら現れた。前にも述べた神經派、人生派としての中河氏のうちにも、さういふ傾向は微見える。「氷る舞踏場」「黄金の城門」等の諸

作は、又さういふ傾向が生んだ作品とも云へるのだつた。私は讀んでゐないけれども、松永延造氏の「出獄者品座龍吉の告白」などにも、さういふ傾向があるさうだし、新時代の臭味には稀薄であるにしても、十一谷氏の作品には、時にさういふ傾向がかなりに力強く現されてゐる。「芋と指環」「静かなる羅列」「街の底」等の諸作に於ける横光氏も、必ずしもさうした傾向に風馬牛なのではないらしい片鱗を示してゐるし、「我々は不才にして、今日の時代に解決的な救ひを齎らす事は出来ない。然し、従來の美學、倫理を無視して何物かを建てようと思つたのは、即ち明日の新しい世界に何らかの貢献をなさうとする意志から生れるのだ」と云つてゐる片岡氏の言葉にも、さういふ傾向の傾きは視はれる。然もこの言葉の如きは、寧ろ新時代全部の、彼等の新藝術運動を辯解せんがために、云はんと欲するところであるらしい。彼等はいろいろな場合に、いろいろな口調で、同じ意味を繰り返してゐるのだ。さうしてそれは無論さうあるべきが眞當だ。此處まで來てこそ、新時代はその當然到達すべき究極地に到達したことになるのだから。が然し、それらの現れは、強ひて求めて得られる程度のものであつて、實際はさまで顯著な形となつてゐるものではないのだ。そこに新時代主觀主義のまだ十分に發展しきれない不徹底さがある。と云ふより、片岡氏の言葉に代表される新時代の氣持の如きは、新時代主觀主義の氣鋭と情熱とを語るといふよりも、寧ろ舊時代の遺して行つた心理的暗翳の濃密さと隙間無さを語つてゐるものではないか。舊時代以來、様々なものが意志によつて追求された。然もその追求された

もの、理想は、凡て空しい永遠の明日であつた。我等舊時代の後に來るものは、果して何を追求すべきであらうか——片岡氏の言葉は、さういふ氣持から生れてゐるのだ。云はゞ新時代の積極的混沌を要約してゐるのだ。我々は不才にして云々の言葉は、纏て新時代自身のさういふ混沌状態への自覺を語るものでないとは云へまい。そこに燃ゆる生命の躍動に充ちた新時代の懷疑が生れる。新時代はさういふ混沌と懷疑とに住するが故に、意志的に追求する代りに、従來の美學や倫理を無視して奔走することに、明日への希望を托してゐることになるのだ。だから彼等の主張や作品に、意志の形をとらない意志と希望とが、底深く藏されてゐるのだと云へないことはないのだけれども、然しそれでは物足りない。それでは舊時代思想の行き詰りに喘ぎながら、僅に衝動と本能とを追うて、出鱈目な生命感に生きようとした彼等の出發點から、殆ど進んでゐないことになる。主觀を見出し、主觀の力を謳はうとする彼等が、なほ且つ主觀に徹しきれずに、舊時代の八方塞りの思念に住して居ればこそ、かうした歩みのない堂々廻りの現象も起るのだ。此の意味で、文壇的分野から云へば寧ろ舊時代に屬する秋田雨雀氏の表現主義の戯曲などに、そこに人生に働きかけ、人生を改造しようとする理想派意圖と意志とを孕んでゐるだけに、却つて新時代的主觀主義の頂點が示されてゐるやうにも思はれるのだ。新時代はその主張に徹し、その運動に意義あらしめるためには、もう一層の飛躍と舊時代よりの脱脚を意圖するのだから、その運動にと思ふ。自ら時に過渡期を口にするだけに、兎に角まだ、主張に不徹底な新時代だと思ふ。

彼等の主張に不徹底であるが故に、人生を動かさうとする意志にまで到達することの出来なかつた新時代は、又一面彼等が餘りに藝術派でのみあつたが故に、さうした不徹底さを一層色濃いものともしてゐるのである。

既に前にも云つた通り、新時代の大部分は、新思潮派を中心とする所謂藝術派の直接の後継者であつたが故に、何うかすると人生其物に對する關心と熱意とが非常に稀薄だつた。人生的意圖からは、時に非常に離れてゐた。従つてさういふ方面から観れば、新時代が人生を見直してそこに様々なものを發見したといふのも、云はゞ彼等の藝術のためのみであつたのだ。だから彼等には、人生其物を對象とする氣持がなかつたのだ。人生其物に働きかけて行かうとする主觀の白熱がなかつたのだ。物のうちに浸透して活動する主觀の力を認めても、その力によつて逆に物を、客觀を、動かさうとする理想派的傾向は、だから彼等の間からは生れ難かつたのだ。中河氏の「氷る舞踏場」に盛られた人生派的意圖を認めながら、然も「さうしたモラリテイなど、此の作にとつて結局大したものぢやない」と批評した川端氏の言葉などによつても、新時代のもつさうした一面は端的に覗はれよう。

ところで、かうした藝術派的傾向は、それが單に前代よりの繼承的發展であるのみならず、又一面新時代の懷疑によつて煽られてもゐるのだ。かうした傾向の最前線に立つ人として、自他共に許してゐる稻垣足穂氏が、「人生を暗いとも面白いともきめられない私たちは、愛が莊嚴で死が嚴肅であるかどうかもわかつてゐない。夢とコカインにひたることが冒瀆なら、つかみどころもない觀念のために谷川の水をのんだり、肉食主義を實行したり、孤獨のうちに迷想したり苦行したりするのも、やはり一つの冒瀆の道樂ではないかと思ふ」と云つてゐる。此の懷疑は、前に述べた積極的懷疑より更に一時代前のものだ。何う歩まうかに迷ふのではなくて、何を價值ありと觀すべきかに迷ふのだから、一層前代思潮の所産なる虛無觀に近い譯だ。新時代はかうした懷疑思想からも、人生的なるものゝ一切の價值を疑つた。自ら彼等の氣持は人生的價值を離れて、藝術派的苦心にのみ傾いて行つたのだ。藝術派として主觀に重點を置く傾向の當然の結果として、せめてもの歡びと陶醉とを與へる、美しく奇妙な夢と幻想とに傾いて行つたのだ。だから彼等の主觀主義運動が徹底すれば徹底する程、彼等の藝術は人生を離れた。彼等の作つた傀儡が、珍奇で巧妙であればある程、それは逆に人生派的意義によつて人生に君臨し、人生を支配して行かうとする意圖を稀薄にして、只美しく怪奇な夢と幻想とを織り出すだけのものとなつて了つたのだ。其の結果、彼等の藝術は、結局人生を離れたが故に美しき夢と靈感とを人生に對つて投げ與へるといふやうな、些か空疎な、舊ロマンテイシズムの時代に逆轉しさうな危険をさへ示すやうになつて來たのだ。さうしてその點への危懼と不安とが、纏て中村還一氏の「モオランに還れ」の叫

びとなり、又舊時代より新時代への猛烈な輕蔑を招く理由ともなつたのだつた。生田長江氏の猛烈な新時代論難も、一面此處に由來してゐるし、中村武羅夫氏は今更らしく「文藝作品に於ける苦悶の意義」を説きはじめましたのである。が、さういふ論難のうちでは、流石に、歐洲大戰後の社會の混亂に即して、其處に來るべき明日の時代を遙望し希求するダダイストモオランに還れといふ中村還一氏の叫びが、一番新時代の急所を衝いてゐたかと思はれる。對人生の關心と熱意との稀薄さが、既にしばしば云つて來た通り、新時代のもつ最大の、また致命的な缺陷であるのだから。新時代は無論單なる藝術派として、空しい夢と幻影とに踊る代りに、も一度人生に還る必要を、確にもつてゐると思ふ。人生に還つて、動く客觀を、更に意志的に選擇して、進んで動かさうとする迄に、飛躍すべき過程にある新時代が、それよりも先きに、人生に還れの叫びをかされるのは、寧ろ慘ましい自己破綻でなければなるまいと思ふ。

が然し、新時代の大部分は、さういふ自己破綻からは間もなく身をかはして來るだらう。彼等は、實際はさうした世界に安住してゐられる程、主觀に徹しきつてゐるのでもなければ、主觀一點張りでもなかつたのだから。彼等の主觀活動は、既に上來の記述でも明かな通り、その根本上には出なかつたのだ。だから彼等の主觀は、結局は主觀夫自身としての凝滞無碍な奔放さを示してゐるのではなかつた。其處にはまだ客觀からの制約があつた。云はゞ彼等はその對客觀

の態度に於て、受身の主觀主義者であつたのだ。客觀を主觀的に解釋するといふだけの主觀主義者であつたのだ。だからこそ彼等には、前にも云つた客觀の主觀化があつて、主觀の客觀化——と云つて語弊があれば、主觀によつて客觀を動かさうとする意圖が、はつきりと彼等の意識の表面に現はれて來ないといふやうな、不徹底さも生れたのであつたし、同時に主客觀の對立を超越した奔放無碍な主觀活動も、彼等には期待することが出來なかつたのだ。泰西の主觀主義藝術家、例へばカンデンスキイなどに見られるやうな、徹底した主觀の奔放さと、外的形象の無視とは、だから彼等には認められなかつたのだ。主觀派として、此の點でもまだ不徹底な新時代が、何うかすると客觀の裏打ちのない夢物語りを物したのは、云はゞ勢ひだ。彼等が藝術的效果の結局は個人的なものであり、分らないものには分らなくても仕方がないと云ふのなどと、勢ひに乗つて滑つたのだ。實際の彼等はそれ程までに客觀を無視し輕蔑し得る徹底主觀主義者ではなかつたのだ。此の意味で、彼等はなほ自然主義的リアリズムの作家と同じ態度に立つてゐるとも云へるのだ。リアリズムの作家が客觀に對して受身であつたのと同様に、彼等も亦客觀に對して受身の態度を持してゐるのだから。所詮は舊自然主義時代に哺まれた新時代であるが故に、一見舊時代的手法と人生觀とから綺麗に脱脚してゐるらしく見えながら、猶ほ且つ脱脚しきれないものを——舊時代の直接の延長線上に立つものとしての相貌を、遺してゐるのだと思ふ。それは無論一面には新時代にとつての弱味であつた。それあるが故に、彼等はその主觀主義に十分徹底する

ことが出来なかつたのだ。が、他面それはまた新時代の強味でもあつたのだ。彼等はそれあるがために、人生から離れざることに懸念を忘れさせるのだ。夢と幻想とにのみ生き、れない人種であることを思はせるのだ。たとへば一時の勢ひであるにもせよ、彼等が人生を離れた夢物語の製作にのみ没頭しさうな危険を示してゐるのが、却つて不思議に思はれるのだ。だから彼等は間もなく再び人生に還つて来るだらう。人生的價値の問題に還つて来るだらう。そして其の時こそ、新しく發見された主觀の力、或は全生命の燃焼力と情熱とに導かれて、彼等は新しき黎明への白道を、更に力強く歩み直すだらうと思ふ。人としてさういふ思想傾向をかなり色濃くもつてゐる上に、主張に際して甚しく果敢であり一徹であり得る強さをもつ横光氏などには、私は殊に大きな期待をかけてゐる。

けれども、それは来るべき未來への覺束ない豫測である。現在のところでは、主觀派としての彼等の藝術は、まだ宙ぶらりんな不徹底さの世界を彷徨してゐるものと云ふより他に仕方がない。さうして此の點では、例の奇妙な幻想の語り手としての稻垣足穂氏が、只一人儕輩を抜いての徹底振りを示してゐると思ふ。氏は他の新時代者流の多くが、その教養の故に、舊リアリズムの客觀尊重の態度からの完全なる脱脚を沮まれてゐるのに對して、佐藤春夫氏よりの純粹なる藝術派的傳統のうちのみ生きるが故に、流石にそれを完全に成就し得てゐる。と同時に、前にも云つた氏の懷疑が、一層此の徹底を助けてゐる。希望は空しい永遠の明日であり、理想は雲のや

うに曖昧な掴み所のないものであると觀じた氏は、纏てその空しさと捉へ所のなさとを、空想的な夢や幻影の空しさや捉へ所のなさと同視した。だから氏にとつて空想と現實との間を劃する線などは無くなつたのだ。架空的などいふ言葉は、氏の辭書には全く無くなつたのだ。「すべてが人間であるといふことがほんとうなら、その人間が人間でなくてはならぬなんて今更バカゲキつた理窟だ。それらの手合には一たい何がほんとうの人間だと考へられるのか？ 吾々の感じ得るかぎり人間でないか？ 吾々の思想し得る限り人間ではないか？ 吾々の想像にうかぶかぎり人間ではないか？ 吾々の空想し妄想し得るかぎり人間でないか？ 吾々にでつちあげられるかぎり人間でないか？」と氏は云つてゐる。其處に所謂物心一如觀の、より徹底した考へ方があると共に、氏はそこから出發して、こちたき永遠の明日を追求するのも、果敢ない夢に酔はうとするのも、所詮は優り劣りのない、たゞ人々の趣味からの問題だと考へたのだ。當然の結果として氏は所謂現實的なるもののみを偏重する傾向を脱した。のみならず、所謂現實的なるものが、自然主義以來出来るだけ嚴密に探求し盡されて、然も結局青ざめた陰鬱さと退屈さとしか持ち合はさないことを知つてゐるが故に、氏は特に架空的不自然的なるもの、世界にのみ、氏自身の藝術的關心をむけて行つたのだ。主觀の世界にのみ躍り込んで行つたのだ。苟くも現實的なもので面白いものなどあるものか、だから現實を游離した幻想を語るのだ——氏は何處かでこんな意味のことも云つてゐた。それだからこそ氏は、例へば「瓦斯燈物語」に於て、氏の幻想

に相應しい暗示となり小道具となりさうな、場末町に只一つ發見された時世遅れの瓦斯燈をさへ見まいとしたのだ。見ないで夢を描かうとするのが、聽て氏の傾向となつたのだ。だから氏は、他の新時代者流の多くのやうに、現實に後髪をひかれてゐないのだ。氏の作品には、重苦しい現實感からの脱脚が、完全に行はれてゐるのだ。立ち騰る煙草の煙のやうな、果敢なさと氣紛れと捉へどころのなさだが、聽て氏の作品の骨組みであり、雰圍氣であつたのだ。新時代のうちでも、物質への具體感に生きようと主張する伊藤永之介氏の如きは、だからかうした稻垣氏の傾向に、不満の感を漏らしてゐる。氏は稻垣氏の「WC」といふ作を批評して、「あの作品が非常に不自然的であることは否めない。主に感覺と直觀から成り立つてゐるのであるが、その感覺、直觀は何等の自然さも必然性も持つてゐない。感覺なるものはそれが如何に純粹なものであるにしろ、官能を無視することは出来ない。それにも拘らず『WC』の感覺の觸發は全然官能の許し得ない範圍に於てのみ爲されてゐる」と云つてゐるのだ。この他にも稻垣氏の作品が、觀念的のトリックに終始してゐることや、甚だしく突飛荒唐であることや、單純なお伽噺に過ぎないことは、寧ろしばしば過ぎる程、非難されたものだつた。が、それらは、稻垣氏の傾向を認める以上、必ずしも耳をかすべき非難ではなかつたのだ。氏はこれらの非難に對して、「私の作について、『大人がよむと面白くない』とか『單純だ』とかいふ非難がきこえるやうだが、大人くさいから子供らしいものをこしらへる。複雑分裂してゐるからこそバカ氣たものがほしい。切つて血

の出る人生であつてみれば、こはしてゼンマイのあらはれる人形をうごかせようといふ企てはどうか」と答へてゐる。其處に氏の徹底的な現實感拒絶が理解されると思ふ。一切の現實的なもの、繫縛を脱して、主觀の——空想的、架空的といふ意味での、主觀の世界に遊ぼうとする人の相が覗はれると思ふ。此の意味では、氏は確に新時代の誰よりも、主觀に徹しきつてゐるのだ。新時代主觀主義藝術運動の頂點の一つは、かくて云ふまでもなく稻垣氏の作品のうちに見出されなければならぬのだと思ふ。私はまだ其の雑誌を知らないけれども、稻垣氏自身や橋爪氏や又内田魯庵氏の言葉などから考へて、玉村善之助氏の主宰するといふ雑誌「ギムギガム ブルル」ギムゲム同人諸氏の作品も、亦稻垣氏のと共通した頂點的な位置にあるものらしい。が、玉村氏等のことは知らない。かういふ頂點にあることは、無論稻垣氏にとつて一つの強みでなければならなかつた。氏は、客觀よりの微塵もの制約を持たないだけに、解放された主觀の力を以て、逆に客觀にのしかつて行くのに、非常にいゝコンディションに置かれてゐる譯だ。前に述べた新時代の歸結であり終局であるべき新理想主義へは、氏は僅に一步の距離にゐるだけなのだ。

が、惜しいことに、そこへ行くには、氏の出發點が古かつた。氏は既にも述べて來た通り、新時代の積極的懷疑より、も一つ古い懷疑思想を抱いてゐる。そのために、氏には新時代的な意志がなかつた。明日の新しい世界に何ものかを貢獻しようとする積極的な心の動きがなかつた。氏

が奇妙な空想を擅にするのは、只趣味だけからのことだつた。だから氏の藝術には、人生派的理想派的の意圖や氣組は、殆ど何處にも見られなかつた。かういふ傾向の氏にして、なほ時に氏自身の藝術が、明るい明日を目標とし又約束してゐるものであるといふやうなことを口にするのは、無論一種の強辯だ。寧ろそこには、自然主義的リアリズムの齎らした人生の陰鬱さに辟易して、そこから逃れようとしてゐるものゝ、消極的な頼りない相が感じられるのだ。此の意味で、徹底的主観主義者稻垣足穂氏は、他の新時代者流とは又別な一面に於て、自然主義的リアリズム的精神よりの脱脚に不十分な作家であることが云へるのだ。氏が、何れの點から見てもその脱脚に十分な作家であらうがためには、矢張り今のやうな、單に現實を離れたゞけの夢や幻想を語る世界から、現實に即して夢や幻想を説く世界に入つて來るのでなければなるまいと思ふ。主観的な夢や幻想を、現實に植ゑつけようとする意圖と意志とに立脚して來るのでなければなるまいと思ふ。荒唐さも無稽さも單純さも、さういふ意圖と意志とに裏打ちされた時、はじめて正しい意義と價值とを持つことになるのだ。さういふ時が來るのでなければ、氏の藝術は、自然主義的人生探求精神の庶子である現在の位置以上には、結局進み得まいと思ふ。新時代の他の一部が、それを思はずに、例へば片岡氏の「雲とゴルフの球」や、殊に川端氏の「青い海黒い海」などに濃厚に示されてゐたやうに、さういふ稻垣氏の現在の世界に、だん／＼接近して行かうとする傾向を示すのは、一面主観主義藝術運動として陥り易い徑路であることを思はせると共に、他面新時

代の住する混沌と、従つて自己把握の不明確さを、物語るものであらう。止むを得ない過渡期的現象であるにしたところで、新時代ももう好い加減に混沌と懷疑と盲目的摸索とから脱していつ頃ではないのかと思ふ。焦燥から、もつと明確な意志的追求への轉回が行はれていゝのではないかと思ふ。

八

その立脚點なる懷疑思想に於て、自然主義的人生探求精神の見出した陰鬱さよりの脱脚に不十分であることを示した稻垣氏は、云はゞその陰鬱さより逃れようがために、美しく奇妙な幻想と不自然なトリックとに没頭したのであることは前に述べた通りだが、かういふ發展の結果、朝の停車場が湯氣を出すスープであつたり、露臺へ白く落ちて來た星を口に入れてみると、冷たくてカルシウムみたいな味がしたり、月を新聞に包んで賣り歩く人が、花火になつたり銀紙になつたりするといふやうな奇妙な世界が、氏によつて展開されたのだつた。

が、さういふ奇妙な世界の根本に、作者の心を重く壓しつける人生の陰鬱さがあるのであつてみれば、それが奇妙で不自然であればある程、色濃く人生の陰鬱さを反映する譯だ。が、作者は、さういふ點への明確な意識をもたないが故に、主観に徹する唯一の道として、只管さういふ奇妙さに執着する。奇妙であればある程、不自然であればある程、新しき價值であるやうに誤認

してゐる。不自然であるだけ、奇妙であるだけのものに、かくて不當に高い評價を許さうとする傾向が生れて來た譯だが、いづくんぞ知らん、彼等はさういふ傾向によつて、舊時代文藝の語らうとしたものと、全然同じいものを語ることになつて了つたのだ。舊時代文藝が正面的に追求し提示した人生の味ひを、新時代文藝が側面的に強調し暗示することになつて了つたのだ。

かういふ錯誤は、又新時代に磅礴する輕薄感と、輕薄なるものへの肯定とも視はれる。

舊時代の文藝は好んで重苦しいものを描いた。酷たらしく厚ぼつたいものに殆ど絶對の價値を置いた。さういふ傾向に反抗する新時代は、却つて輕薄さに或る價値を置かうとする。が、結局輕薄さは、夫自身だけでは、輕薄さ以上の何ものでもなかつた。正面的には無論何等の價値も認められないものだつた。だから彼等はそこに何等かの人生的價値を認めようとするためには、勢ひ前時代の重苦しさと同厚ぼつたさに還らなければならなかつた。彼等のうちでも、殊に人生的價値を輕蔑すること上述の如き稻垣氏さへ、「如何に輕薄なものでも、或はそれを喜ぶ心でも、その由つて來る必然を考へると、輕薄でも何でもなくなる」といふ意味のことを云つてゐた。輕薄さに走る氣持の底には、舊時代の重さと厚さに倦みきつた氣持がある、だから輕薄さは決して單なる輕薄さとのみ見らるべきではない、と云ふのである。陰鬱さと冷嚴さとに倦んだものには、馬鹿氣た輕薄ささへ、一種のリフレッシュメントとしての感興と魅力とを感じさせる、だから輕薄さは尙い、と云ふのだ。其處に亦新時代らしい思索の不十分さに原因する論理の飛躍がある。成

程舊時代的陰鬱さと重苦しさとに結びつけて考へる時、輕薄さにも一種の意義は認められる。が、それは決して輕薄さ自身のもつてゐる意義ではないのだ。重苦しさと結びつけられた關係から生れた、寧ろ輕薄さ自身とは離れた意義なのだ。だから輕薄さが意義のないものであればある程、その意義は増して來る、といふやうなことも起るのだ。従つてさういふ輕薄さの反映する意義を發揮しようとするには、重苦しさと結びついた關係に於てするより他に仕方がない。にも拘らず、新時代は切り離された輕薄さ其物に價値を認めようとした。さうして之を追求しようとした。重苦しさを捨て去つて、後に残つた單なる輕薄さだけを有難がらうとするのだ。恰度現實の苦さから幻影に逃避したものが、聽て幻影を幻影としてのみ追求することに、ある意義を認めようとしたのと同様に。

無論さうした氣持にも、明るさと希望とを追はうとする新時代的意志が、潜在してゐないとは云はれなかつた。が、例へば何んなに強烈な意志が潜在してゐるのであるにもせよ、重苦しさを切り離しては、その意志の重さを十分に象徴することの出來ない輕薄さを、輕薄さだけとして追求するのでは、折角の意志を、何でもない輕薄なものに翻譯して了ふのでなければならなかつた。新時代は、この點への誤認に出發して、彼等の藝術に、この何でもない輕薄さ——淺薄さと浮は調子とを漲らした。それは素より新時代にとつて誇にも何にもならなかつた。無論新しさにもならなかつた。却つて古い舊時代的精神の亡靈に憑かれてまごついてゐる新時代の相を思はせる

ただだつた。輕薄さなどにさへ縋りついて明るみに浮び出さうともがく程、舊時代の重苦しさに
押し潰されきつてゐる新時代なのかと、思はせるだけだつた。舊時代の子——舊時代の遺産の繼
承者——彼等は此處でも亦それ以上には出てゐなかつたのだ。彼等の輕薄肯定は、矢つ張り舊時代
的精神の暗さを、側面的に暗示するだけだつた。彼等は舊時代から殆ど離れてゐなかつたのだ。

が、此の言葉は、何も幻影や輕薄さを追ふところのみ當てはまるのではなかつた。上來しば
しば述べて來た片岡氏の官能的享樂主義の主張なども、それが前代思潮の歸結なる絶望と懷疑と
より出發して、僅に官能的な刺戟に、具體的な生命を感じようとするだけのものであつてみれば、
十年の昔、自然主義的的人生探求の結果に怯えた人間が、惡魔主義や享樂思想に走つたのと、全然
同じ軌道を迎るだけのものだつた。新しき意志と舊時代よりの脱脚とは、そこでもまだ全然表
示されても意圖されてもゐなかつた。加宮貴一氏が聲を大にして要求する明るさと可笑し味との
文學なども、それが人生の冷厳さと陰鬱さとに辟易した人間の、歡びと安息との場所として要求
されるのである以上、上述の諸傾向など、同じ心理的過程によつての産物だ。貧乏を描くに慣れ
た加宮氏が、まだそんなにどん底らしい暗さにまで味到してゐるとは思はれなかつたけれども、
兎に角そこからかういふ世界への逃避を希求するに至つたことは、如何にもありさうな發展とし
て理解される。が、少くとも我々の世界に於て、ありさうな發展は常に不可不なのではない。加
宮氏が人生の可能に向つてまづ努力しようとする代りに、逸早くかうした世界に逃避して、笑話

や一口話をさへ禮讃しようとしたのは、一切の可能を追うて失敗した後の絶望時代の心理的必然
であるとは云へ、矢張り氏の意力の不足——と云ふより閑却を思はずにはゐられない。川崎備寛
氏が、「加貴氏が笑ひの文學提唱者であるために、殊更どんな題材をもカリカチュアにしてはう
とし、又はカリカチュア化して了はないと氣が濟まないのぢやないかと思ふ」と云つてゐる所に
も暗示されてゐるやうに、氏が架空の笑ひをさへ強ひて求めようとし、せめてもの夢の圓かさだ
けを願ひ、又は笑話や一口噺にさへ敬意と眞面マツトの愛著と慰安とを感じようとしたりするところ
は、殊に色濃く人生の暗さに壓倒されたものゝ感傷と弱々しさとが感じられる。消極的であり退
嬰的であり淺薄である。そこには實際牧野氏以下の傾向を論じた時に云つた程の人生に對する積
極的な氣持もないのだ。それが明るさとユウモアとを求める點で、人生の暗さに反撥した新時代
的希求の一面を、必ずしも表示してゐないのではないのだけれども、然もかう消極的では、新時
代的積極主義とは、餘りにその繋りが稀薄だと思ふ。新時代としての中心的作家たるべき影が薄
いと思ふ。

かういふ加宮氏の傾向などに比較すれば、同じく明るさを追求するのでも、岸田國士氏の傾向に
は、餘程新時代的積極主義の色が濃い。氏は加宮氏の如く人生を離れた明るさとユウモアとの夢
の國に逃避して、其處に果敢ない束の間の歡醉を味はうとするのではなかつた。人生其物のう
ちに明るさと輕快さを求めようとするのだつた。それらのものは、舊時代的對人生の態度を以

てしては、此の人生に決して求められないものだつた。が、實は人間の「腹次第」で、或は態度次第で、人生の何處にでも求められるものだつたのだ。舊時代的リアリズムが、「あるがまゝ」と信じた人生を、そのまゝ「盲信しない人間の、少しばかり光つた眼の裡」に、それらのものゝ相が映るのだつた。氏はさういふものを正面に持ち出すことによつて、人生の暗さとちたさを驅逐しようとしてゐるのだ。此の意味で、佛蘭西仕込らしい氏は、私が前にコントに感じた人生見直しの意圖の上に、正しく立脚してゐることが云へるのだ。さういふ意圖から、氏は、「機智が重い靴を穿き、フアンテジイが詩と絶縁し、下らないことをむきになつて下らながる近代の日本」を輕蔑し、そこに却つて朗らかさと明るさを追求し、更に之を擴張し人生に植ゑつけようとする力することになつたのだ。新時代として、コンスピキアスな主張ではないけれども、兎に角正しき諦視と意志の裏打ちとをもつた主張だと思ふ。氏の作品が、常にまやかしのらしい現實游離感に陥らず、空しい輕薄さに墮せず、然も讀者を快い微笑に導いて行く所以は無論此處にある。シリアスな十一谷氏と正反對な方向を歩みながら、兎に角同じ程度に眞物といふ感じのする作家だつた。

が、たゞ、かういふ傾向の必然的歸結として、氏は何うかすると、重々しいもの、莊重なものを、理由もなく輕蔑しさうな危険はもつてゐた。不易の眞實の冷嚴さの上を、軽く滑つて了ひさうな危険はもつてゐた。「既にあるものは求めるに當らない」といふ意味のことをしばしば口にする氏は、纏て不易の眞實を無視して、流行の潮先にのみ踊らうとする危険に面してゐるのではないかと思ふのである。そこにまだ舊時代精神への捉はれが感じられる。冷嚴さや莊重さは舊時代的なものだ、だから我々は之をすてなければならぬ、と考へてゐる氏であるらしいけれども、舊時代を脱脚するのが新時代の使命であるのなら、舊時代の見た冷嚴さや莊重さをも、又舊時代とは違つた眼で見直すのでなければなるまい。見直して違つた意義を——暗さや陰鬱さと結びつく代りに、明るさや可能に結びつく意義を、そこに見出して來るのでなければなるまい。でなければ、氏の明るさや輕快さの追求は、單なる趣味漁りに墮して了ふのではないかと思ふ。新時代でも、佐々木茂索代の如きは、既に幾らかさうした趣味漁りの世界に墮して了つてゐるのではないか。それでは昔久米正雄氏が、その淺薄な傾向を罵倒されて、「此の日本にのみ生ふる若竹の如きなよやかさと明るさを追求する」と答へたのと、殆ど違はないものになつて了ふ。たゞ久

米氏が、それより外に出られない人であつたのに對して、これは努めてさういふ世界にのみ着しようとする意識的積極的な氣持に、彼等の世界を限定されてゐるだけの相違があるだけだ。無論さういふものがあつて悪いといふことは無いけれども、それだけでは物足りない。彼等の積極的な氣持や意志は、もつと根本的第一義的方向にも、動いて行くことの出來るものだ。さうして又さうした方向に動いて行くのが、纏て新時代藝術運動の必然であり、究極の意義なのではないかと思ふ。岸田氏等の傾向などを思ふ時、新時代が、さういふ究極への途上にあることを喜ぶと

共に、單なる輕快さへのみの關心が、懸て彼等をとんでもない岐路に導くのではないかとも懸念せずにはゐられない。岸田氏の如き、單なる藝術派である以外に、同時に人生派的理想派的の意圖をも、多分に有するのである以上、もう一步舊時代への捉はれより脱して、新しき眼光を、全圓的に人生に注いで行くのでなければなるまいと思ふ。

九

以上、私は最近の文壇に現はれた諸傾向についての大體の考察を終つた。所謂プロレタリア文學が、さしたる浪もあげずに、衰勢に向つた後の、比較的長い間の文壇的動搖を、一つの流れとして出来るだけ單純に纏めてみようとしたために、却つてかなりごた／＼したものになつて了つたかと思ふ。のみならず、かなり眼を通した積りだつたけれども、既にしば／＼白狀して來た通り、私の新時代への接觸はまだ／＼不十分だつた。上來の記述に屢々遺憾があつたばかりでなく、石濱金作、宇野千代、戸川貞雄、下村千秋、等、等の諸氏については、殆ど何等言及するこゝとが出来なかつた。が、それは一面私の準備不足の罪であると共に、他面いろいろな辯解がないでもなかつた。彼等の或者は近頃殆ど問題とすべき作を書かなかつた。或者は、文壇的分野に於てこそ新時代——新進作家であるものの、實際は舊時代の直接の延長線上に立つてゐるだけだつた。舊時代以外に飛躍しようとする意志と情熱との何等の片鱗をも示してはゐなかつた。さう

いふ人々を、私は敢て閑却することも出来た譯だ。「新現實主義末期の搖蕩」といふ標題は、此の點幾分曖昧だつたが、私のこの文章に於ける意圖は、舊時代を脱脚せんとする努力と、その努力の現れとを、出来るだけ巨密に調べ上げようとするのにあつたのだから。だから、さういふ最初の意圖を別にして、新現實主義末期云々の題目に添ふやうにするためには、此處にさうした、舊代繼承の嫡子の一流れのあることをも云はなければならぬ譯だ。殊に下村戸川兩氏などの如く、新感覺派及びその周圍の人々とは、まるで異つた人生派的傾向を有つ人々に就ては、多少とも觸れなければならぬ筈だ。古臭い彼等の主張其物の吟味は兎に角、さうした古臭い主張を主張する傾向の生れたことには、上述新時代文藝界の大勢と併せて、プロレタリア文學の衰勢なども絡んで、考へらるべき相當重大な意味がある譯だから。

が、その點に關するく／＼しい考察はもう措かう。さうして此處にはたゞ上來考察して來た新時代藝術運動に關する最後の視點を述べて、此の長びいた文章を終らうと思ふ。

云ふまでもなく新時代藝術運動は、それが舊時代を脱脚せんとする意圖に出發したものであるが故に、舊時代文藝が、「あるがまゝ」と觀じた世界の外に、他の何等かの世界を發見し創造せんとするものであつたのだ。舊時代文藝によつて與へられ指示された世界の他に、可能を追つて組み立てられ考へ出される世界を求めようとするものであつたのだ。平面的から立體的へ、靜的から動的へ、現實から空想へ、概念から感覺へ、説明的抽象から暗示的具象へ、客觀主義から主觀主

義へ——かくてこれらの飛躍に、彼等の生々しい生命感追求を托したのだつた。然も、それらの飛躍を統一指導すべき新しき目標はまだなかつたのだ。たゞ舊時代の人生觀の行き詰りに對する反動的飛躍に、彼等は住するだけだつたのだ。だから彼等には理想派的意圖が稀薄だつたのだ。主觀を統一して人生に働きかけようとする意志が生れなかつたのだ。却つて彼等の積極主義は、何うかすると舊時代の虛無思想と、直接の繋りをもつことになつたのだ。彼等はそこに論理と概念との捉はれから脱した。彼等には神もなかつた。主義もなかつた。無論道德や法則もなかつた。たゞ彼等自身の利那的生命感があるのみだつた。「我考ふ、故に我あり」ではない。「我感ず、故にあり」であつたのだ。だからそこに、具體と抽象とを問はず、彼等の感じ得る限り、思惟し得る限りを實在と觀ずる、一切肯定主義が生れたのだつた。彼等はさういふ實在を、云ひ換へれば一切のものを、生きてみるによつて、前代と違つた人生の可能を發見しようとしてゐるのだ。輕薄さも肯定された。官能的享樂も肯定された。夢と阿片に浸ることも肯定された。「十九世紀的頹廢をも肯定する快朗性」彼等はそれをかうも呼んだ。彼等はその肯定が聽て人生の輝しい曙——光明と愉快とに充ちた未來の人生を招來すると信じようとしてゐるのだ。そこに彼等の出鱈目さと明るさと、頗る呑氣な健康さとがある。が、此の點では、彼等は舊時代の志賀氏等が到達した世界と、一脈の共通した世界に住んでゐるのだと思ふ。人生はあらゆる暗さと不可能とを孕みながら、然も天の定めた豫定の中に、靜かな運行と發展とを續けて行く。天の思召しに

從つて、所謂貴方任せの態度に安住すれば、聽て人生の最も根本的な調和の世界に、明るさに、味到することが出来るのだ。志賀氏の「暗夜行路」其他の近什は、さうした豫定と天の調和の明るさを語るものだつた。新時代の考へ方は、これに似てゐると思ふ。殊に志賀氏の示したやうな世界を、更に我儘に解釋して、「善かれ惡かれ天の支配と調和とのうちに住する人間であるのなら、何も天地に踞踏して、道義と規矩とに縛られてゐるには當るまい。もつと我儘に、もつと出鱈目に生きることが、矢張り天の調和に參劃することになるではないか。そしてまたそれが人間にとつて眞當ぢやないかと思ふ」といふやうなことを云つた佐藤春夫氏の「風流論」の結論は、一層新時代的だつた。彼が一切肯定的であるが如く、又毫末も與へられた人間の意志の自由に觸れなかつた如く、新時代も一切肯定的であり、人間の意志の問題には觸れなかつた。

けれども、一切肯定は、果して人生に明るさを豫約するものであうか。中河氏の「黄金の城門」や「氷る舞踏場」は、却つてさういふ一切肯定の裡に、直ちに暗さの生ずることを暗示してゐるとは云へないだらうか。とすれば、さうした肯定するが故の暗さに達著した時、新時代は果して何うなるのだらう。又その暗さを逃れんがための、舊時代の否定に還るのではないであらうか。それを思へばこそ谷崎精二氏も、「新時代の歩いてゐるところは、我々のとつくに通つて來た所だ。そこを通過つて我々は人生に意義あるものを追求しようとするための苦悶に入つて來たのだ」といふ意味のことを云つてゐたのだ。第一、あるがまゝの人間全部を肯定して、その人間全部—

「たとひ意識下の現象をも含むものであつたにもせよ——」によつて組み立てられてゐた舊時代的人生以外の人生を、創造し出すことが出来るものだらうか。新時代藝術運動の意義と使命とが、完成されるものだらうか。

無論さうした一切肯定が、多くの否定を含んで、然も人間に陰鬱さと病的頹廢にさへ憬れる程の暗さとを齎らした舊時代精神より解放されて、新しく人間に即した、然も人間の希求する明るさと歡びとに結びつくべきモラルと規條とを、暗示すべきものであるには相違ない。舊時代の否定したもの、うちに、新しき人生の可能を見出さうとする氣持を、暗示してゐるものであるに相違ない。が、その暗示は、彼等が人生の事業を選択し、彼等の理想とするところを人生に植ゑつけようと思志するに及んで、始めて彼等の作品の裏打ちとなり彼等の作品に匂ひづけるものなのではないであらうか。意志的追求のまだ判然した形になりきらない新時代文藝には、まださうした暗示も十分に感じられない。だからそこには重さがない。たゞ舊時代への反動的な賑かさと奔放さがあるだけだ。その賑かさと奔放さを通して、舊時代のそれよりもつと人生と人間とに則したモラルを求めようとする希望と焦燥とが感じられるだけだ。その希望を、たゞ天の調和と自然の運行とによつて達しようとする代りに、人間的な意志によつて追求しようとする態度が確立した時、はじめて新時代の焦燥は確實な歩みと變るのだらうと思ふ。人間は、天の調和にさへ反抗することの出来る意志の自由を與へられてゐる。然も佐藤氏や新時代が考へてゐるや

うに、何う出鱈目を盡しても、結局天の豫定と調和の世界に住し得るものであるのなら、例へば何んな意志を振り翳して進まうとも、矢つ張りその調和の中に住し得るのではないだらうか。振り廻はし得る意志を與へられてゐるのは、寧ろさういふ調和を思はずに、人間的な調和と明るさを希求し建設して進むべく運命づけられてゐる人間であることを、示すものではないだらうか。私にはそれが、人間にとつて最も合理的な、最高の生活形式であるやうに思はれる。「人間が神にまでなつた」と云ひ、「自我意識以外のすべてに權威を認めない」と云ふ新時代が、何故に人間の力の最も端的な現れである意志を、何時までも無視し或は輕視してゐるのであらう。自力によつて理想を展開させる代りに、一切肯定、調和自ら與へられんの他力本願に住してゐるのであらう。私の新時代に對する不満と疑ひとは、既に上來の記述でも明らかであらう通り、常に此の點にかゝつて存するのだつた。彼等はまづ其の主觀に徹して、意志的に追求すべき目標を確立すべき必要に迫られてゐるのだと思ふ。

が然し、新時代は既に一步を踏み出した。舊時代的晦暎から脱して、新しき黎明への白道に、最初の一步を踏み出した。修業が纏てもう一步進んだ時、舊時代を忘れるだらう。さうして再び人生に還つて來るだらう。新しき人生的價値の追求と、新しき理想主義とが、その時達成されるだらう。此の意味で、舊時代的暗翳に捉はれてゐる現在から、更に舊時代を脱脚しきつて、それが問題でなくなる次の瞬間後の彼等に、私は大きな期待を繋いでゐるのである。過渡期が、出來

るだけ早く通過しきられるのを、望まずにはゐられない。

書 後

三笠書房の竹内さんから、「現代作家論叢」の話があつて、舊稿を整理してゐるうちに、こんな形のものが出来上つた。

舊稿を集めたものだから、素より不満な點が多い。多少は手も入れたし、校正刷にまで兎角赤インクを塗抹して、書房の大雲氏を困らせもしたけれども、矢張り満足出来るものにはならなかつた。一番不可いのは、私自身新現實主義風の虚無觀に染められてゐながら、むきになつて人生派的意志や情熱を求めてゐる自己矛盾と、其處から來る論旨の不透明さであらう。歴史的な觀方、社會的な觀方、何にもありはしない。たゞ作家と作品との、一通りの解剖と分析とがあるばかりである。

それにも係らず、私は本書の出版を、かなり喜んでゐる。元來何を勉強するともなく、至極漠然と過して來た私が、何うかすると明治大正文學研究者の端つこに連ねられたりするのは、主として藤村先生の命に依つて、「志賀直哉の世界」以下幾つかの文章を、國語と國文學その他に發表したからである。先生からさういふ仕事を命ぜられたのは、それ以前、「荆棘の道とその作者」以下、將もない短文の幾つかを、書いてゐたためであらう。無藝無能せめて此の一筋にでも繋るより他、生きる道も知らない今日になつてみると、これらの文章が、怩たるものを感じさせるとともに、矢つ張り懐しいのである。だから本書には、「荆棘の道とその作者」のやう

な、微の生へさうなものも收めて置いた。「志賀直哉氏の世界」など、執筆當時、當の志賀氏から割合喜んで貰へた喜びも忘れ難くて、不十分な原形をそのままに、再録することにした。本書のやうなものを、読んでくれようといふ人なら、多分さういふ著者の感傷をも、恕してくれるだらうと思ふ。

と云つて、本書が、讀者にとつて、何の役にも立たないものであらうとは、幾ら私でも考へてはゐないけれども——不十分なながら、新現實主義文學の大凡位傳へ得てゐるだらうと思ふけれども、兎に角私自身、何時までもかうした感傷に浸つてゐようとは、無論思はない。「新現實主義の人々」と題しながら、葛西善藏・宇野浩二・山本有三氏等など、重要な作家の數々をも漏らしてゐることだし、それらの人々の業績をはじめ、新現實主義以外の現代作家の多くに就ても、追々調べて行かなければならない。幸にして第二の「現代作家論叢」をでも編む機会が恵まれたら、その時にはもつと大威張りで、自序でも書後でも、何でも勇敢に書き飛ばし得るやうでありたい——あらねばならぬと思つてゐる。敢て自ら戒しめる次第である。

過分の序文を賜つた藤村先生、かういふ書物を計劃させてくれた竹内氏、その他本書の出版に際していろいろお世話になつた方達に、厚く御禮を申し上げる。(三月二日)

現代理論家叢

昭和九年三月十五日印刷 昭和九年三月二十二日發行
初版一千部發行

著者

片岡良一

裝釘

秋朱之介

印刷

堀内文治郎

東京市牛込區山吹町一八一

發行

竹内富子

東京市淀橋區戸塚町一ノ四四九

發兌

三笠書房

東京市淀橋區戸塚町一ノ四四九
電話牛込四〇一六・振替東京三〇九六

定價二圓八十錢

三笠書房新刊書

内田百間著	百鬼園隨筆	定價一圓五十錢 送料廿二錢
内田百間著	冥途 (創作集)	定價一圓五十錢 送料十四錢
レイモン・ラディゲ 堀口大 學 譯	ドニイズ	定價廿五錢 送料廿一錢
アンドレ・ジイド 竹内道之助 譯	ドストイエフスキイ研究	定價一圓八十錢 送料廿一錢
アンドレ・ジイド 澁野隆三 譯	モンテエニユ論	定價廿五錢 送料廿一錢
マルセル・ブルウスト 近藤光治・齋藤磯雄 譯	若き娘の告白	定價一圓八十錢 送料十四錢
レオン・ビエル・カン 吉村道夫・小田善一 譯	ジイド研究	定價一圓五十錢 送料十四錢
アントン・チエホフ 梅田寛 譯	可愛い人 (近刊)	定價一圓八十錢 送料十四錢
新村出 著	隨筆集 (題未定)	定價未定
佐藤春夫 著	隨筆集 (題未定)	定價未定
三笠書房 豪華版	ドストイエフスキイ全集 全十七卷	一冊二圓五十錢 送料卅二錢

5/5

8

終